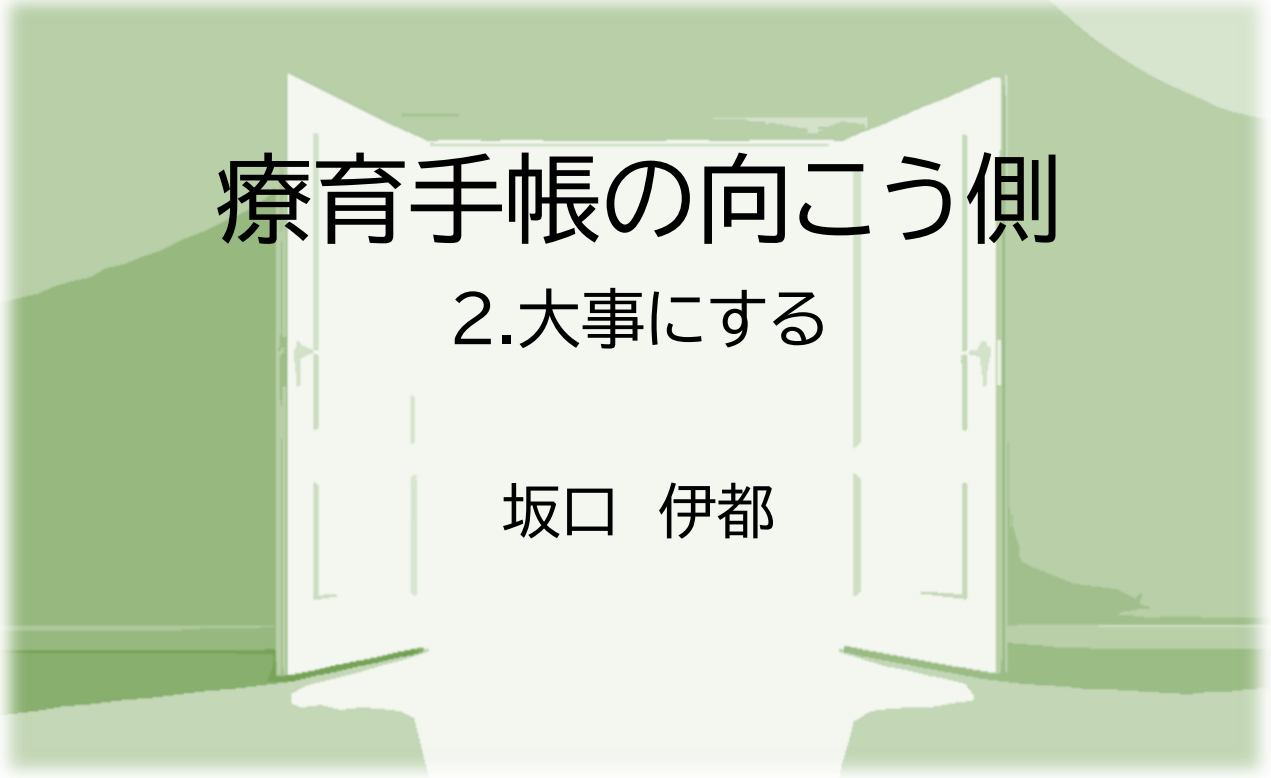




療育手帳の向こう側

2. 大事にする

坂口 伊都

はじめに

子どもがある程度言葉を使えるようになると、自分の正当性を主張してくるようになりますか？例えば、妹とおもちゃの取り合いになり、妹を泣かせてしまった時、「だって妹がおもちゃ取った」「僕、叩いてないもん」と、自分は悪くないと言い張ります。明らかに嘘をついているとわかっている時でも、必死になって嘘をつき通そうとして、頑として譲らない。その時、何て声をかけますか？

- ①「嘘を言わないの、わかっているのだから、正直に言いなさい！」
- ②「また妹が泣いているじゃないの。お兄ちゃんなのに、もうあなたと話したくないわ」
- ③「ふーん、そうなの。妹もこのおもちゃが欲しいって、困ったね」

どれが近いでしょうか。これは家族システムのパワーバランスに関係してきます。親が嘘はいけないことと頑なに思ってしまうと、子どもが嘘をつくことを許せなくなったり、嘘ばかりつくように育つのではないかと不安になり、①のように威圧的に怒ったり、②のように兄から距離を置いて無視したりしてしまいます。これはどちらも、子どもをコントロールしようと親のパワーが強く働いています。③は、事実を伝え、妹の代弁をしています。きょうだい喧嘩は毎日のことですから、いつも冷静に対応できるものではありませんが、嘘ということを考えると大人も日々の中で無意識に嘘をついています。体調が悪くてしんどい時に「大したことないから大丈夫」と平気な振りをしたことはありませんか。これも嘘ですが、別の言葉に置き換えれば、心配をかけたくない、気遣い、思いやりとなるでしょうか。嘘は嘘でも、

相手を傷つけるのではなく、相手との関係を保つための嘘は割と使っているものです。単純に嘘はいけないとだけ伝えると、子どもは大人の嘘に不信感を抱くことがあります。

では、先程の妹を泣かせてしまった僕の嘘はどこからきているのでしょうか。嘘をついていると「しまった、みつかった」という焦りが出て、言葉もしどろもどろになっています。とっさに嘘をついてしまったのでしょうか。「叱られたくない」と防衛反応が出て、さらに親に「嫌われたくない」と必死になっていると考えることができます。

親の方は、まだ小さい妹に手がかかり、お兄ちゃんなのだから妹を可愛がって欲しいと期待しますが、僕自身が妹と同じように手をかけられてきたことを思い出せるわけもなく、親を取り合う強烈なライバルを可愛がる余裕もなく、僕だけを見て欲しいと欲張りなことを願っているかも知れません。

親にしてみれば、子どもの困った行動ですが、小さな子どもは、どうしてもなく親を求め、やり方は下手過ぎますが、親を惹きつけようと頑張っているのです。療育手帳の面接で、親を求めているかどうか分からない、親に反抗ばかりすると耳にしますが、子どもの中心に親が存在していることは子どもが教えてくれます。親が子どもから反抗的な態度を取られ、自信をなくしそうになりますが、どの子も世界の中心に親が根ざしています。子どもは大人が世話をしないと生きられません。そして、大人にしてもらったことを他者にしようとしします。大事にされれば、周りを大事にする術を学びます。では、どうしていくことが子どもを大事にすることになるのか、考えていきたいと思います。

他の子と比べて

療育手帳の聞き取りの際、「いつ頃から発達面で気になり始めましたか？」という質問をすると、「周りの子と比べて、うちの子喋らないな、できないなと感じて」と言う方が多くいます。健診で要観察と言われ、相談をして療育につながっていき、同じようなしょうがいを持った親子に出会い、他の親の苦労話を聞き、自分達だけが苦しんでいるわけではないと知り、落ち着いて考えることができるようになり、励まされるようです。療育の場で、子ども同士を比べる話題を聞くことはないのですが、保育園や幼稚園では、自分の子どもだけができていないと辛くなる人が多いようです。



子どもを育てていると、言葉が早い、オムツが取れるのが早いということが称賛され、何故か母親の教育がいいからだと言われることがあります。「〇〇ちゃん、もうオムツ取れたそうよ、偉いわね」と誰かが煽り親を焦らせますが、トイレトレーニングは、子どもの身体の大きさが違うように、それぞれ子どもの膀胱の大きさ、尿意の感じ方に個人差があるのは当たり前で、そこが影響している部分が大きいといえます。

他の子よりも早く、皆に後れをとらないようにしないと、焦る

気持ちが膨らむと、できたことよりもできないことに目が向いてしまいます。

子どもは、大人からの評価、特に親からの評価に敏感です。私たち大人は、子どもの前で何を言っているのでしょうか。悪気なく、心配で「また、できないの」「本当にグズで何しても遅いのだから」とできないことを連発しているのかも知れません。

ほとんど話さない、大人しい印象の子が来た時は、幼児から小学校低学年までは、皆の前で面白いことを言ってクラスで目立っていたそうですが、小学校の中学年頃から友達と急に話さなくなったといいます。おどけて見せると周りが笑って、皆が自分を見てくれていると感じていたのでしょうか、同じことをしても思春期に入る年代になると白けた目で見られ、その場の雰囲気が悪くなり、どう対応したらいいのかわからなくなったのかも知れません。年齢が上がると、ますますコミュニケーションが複雑になり、自分一人ではどうしようもできなくなっているのではないかと感じました。

ある子どもさんは発達検査を終えて、「できなかった」と落ち込んだことがありました。発達検査は、通過したところまでを数値にしていくので、通過しないところまで進め、全部できたという形には、なかなかならないものです。テストとは違うのですが、それがこの子には理解できません。できないとダメだと思い込んでいます。その子は、

「できなかった」と涙ぐみ、
「最後まで、あきらめずにやり通したことがすごいのだよ」と判定員に言われ、
「でも、できない自分が許せない」と泣が溢れ、
「できたかったのだね。でもね、最後までやり通せたことはすごいし、自分を自分で褒めてもいいことなのだよ、よく頑張ったね、大丈夫だよ」と母を含めた大人達がそれぞれ伝えました。

その子は最初ピンときていないようでしたが、帰り際には笑顔を見せてくれていました。学校と名がつく所にいくと成績で優劣がつけられ、傷つく場面も繰り返し体験してきたのでしょうか。発達の特性というのもベースにあります。できないと言われるのは、誰でも嫌なものです。勉強やスポーツができれば、将来安泰で何も困ることはないのでしょうか。世の中に出れば、勉強の成績の優秀さよりも人柄が問われます。人柄が良いとイメージするのは、おおらかで、言われたことを素直に受け止め、ルールを守ろうとする。他にもいろいろと考えられますが、子どもで捉えるとかわいい印象を与える感じになるでしょうか。

かわいがられる

自分でも知らぬ間に「できない」と言ってしまい、子どもを傷つけてしまうことは誰にでも起こり得ます。子どもを褒めて育てましようと言われますが、いつも褒め続けることはできません。他の人を叩いたり、蹴ったりしたら止めなければならないし、何故それをしてはいけないのか伝え続けなければなりません。この前も言ったのにまたしていると、同じことの繰り返しでため息が出ます。

毎朝、登園や登校に遅れないように子どもを起こすが、なかなか起きない、着替えない、ご飯を食べない、歯磨きしない、うんざりしてきます。親が焦れば焦るほど、子どもが動かなくなるのは気のせいでしょうか。

子どもがオムツをしている頃、この時間の電車に乗らないとならないという時に限って、出る直前に「うんこ出た」と言われ、予定していた電車を諦めたことがありました。家族旅行の前日に熱を出したこともありました。本当に予定通りにいかないのが子育てです。

また、子どもがいう事をきかなくても、怒らないように、怒らないように、冷静を保とうと頑張りましたが、仕事や人間関係のストレスや寝不足、疲れ、体調不良が重なると抱えきれなくなり、噴火してしまいました。噴火すると、「ママ怖い」と言われ、それまで冷静に対応しようとして努力してきたことが一瞬で水の泡です。子どもが成人してから、「ママって、こういう面あるよね、昔から」とか言われ、反撃されますのでお気をつけください。

ただでさえ思い通りにいかない子育ての中、ついつい子どもを攻めてしまいます。

「だから言ったでしょう。何度言ったらわかるの」

「〇〇ちゃん是可以るのに何であなたはできないの」

子どもだけではなく大人もですが、いい事を言われたことよりも悪い事を言われた方が記憶に残ります。いいニュースよりも悪いニュースの方を覚えているのと同じです。そこに発達の課題があると、より深く記憶に刻まれるのではないかと感じます。学校でも家庭でも「できない」と言われることが多いと外での交流を避けようとしていくようです。

逆に交流をためらわない子にも出会います。その子は、できないという怖さを持たず、私のことを受けとめてくれると全く疑っていないようです。その子は楽しそうで笑顔です。何がそうさせているのだろうと見てみると、できなくても、失敗しても周りがちゃんと「ダメではない」と伝えていました。時には、子どもに強く当たってしまうことがあっても、大人側の間違いを子どもに伝え、子どもに謝っていました。

例えば、子どもが叩いてきた時に「叩いたらママ痛いよ、ケガしちゃう。やめて、叩かないよ」と母が言うと「ママが〇〇って言ったから、嫌だった」と拗ね、「ごめん、ごめん、ママが悪かったね」と頭を撫でていました。

別の子が、検査前に照れて机の下に隠れると、

「何？照れているの(笑)」

さあ出てきて、ここに座ってください」

とお母さん。

判定員側も笑いながら



「照れちゃうね、緊張するよね」と言うと、

その子は笑顔で机の下から出てきて、判定員と手をつないで検査をする部屋に向かいました。

「おっ、行けましたね」と驚いて、母に声をかけると

「ちょっと前なら、私が一緒じゃないと絶対に行けなかったんです、すごい!!」

「かわいいですね」

「本当、子どもがかわいくて仕方ないです。親バカなんですけどね」と教えてくれました。

療育教室に通い、いろいろな人と関わるようになってから知らない場所を受け入れられるようになってきたそうです。新しい場面でパニックになることもあったそうです。このままではいけない、この子のために動かないといけないと始めたのが療育教室だそうです。療育手帳の判定をするこの場所も初めて来た場所でした。

外の世界のルールを子どもに教えていくことは、必要です。だからこそ、子どもが思うように行動できないと、漠然と将来に不安を感じてしまいます。さらに、他の子ができてうちの子ができないと不安を煽ってしまうと、子どもとの関係が悪循環に陥っていきます。時には、子どもに強く言い過ぎてしまうことは誰にでも起こります。その時は、自分は他の子とうちの子を比べていないだろうかと考えてみてください。それだけで、少し冷静になれます。少々の失敗を親がしても、それを子どもに謝れば、子どもは親でも失敗して、やり直せることを学びます。親が完璧である必要はありません。

子どもを叱らなければならない時もあります。子どもが成長し、大人になった時どんな人になってもらいたいですか。ちゃんとかわいがられた子は、社会の中に入っても誰かに助けを求めたり、周りから支えられる人になる力を持つようになると感じます。子どもが荒れて大変な時もあるでしょう。でも、かわいがられてきた子は人を受け入れる力を持っています。私たちが、子どもをかわいいと思って子どもに接すると、その子は言葉にしなくても全身でそれを感じ取ります。それが、子どもを大事にすることにつながり、親子のパワーバランスがほどよくなる第一歩でしょう。

